
DEAD ZONE

忌 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEAD ZONE

【Nコード】

N5468V

【作者名】

忌 一二三

【あらすじ】

通常有り得ない現象が発生する特異地点「DEAD ZONE」デッド・ゾーン
ここでは日々様々な事件が起こり一匹狼の刑事・功刀仁くぬぎ じんはこの街で起きる犯罪者と？異常？と戦い続ける。腐敗と暴力の温床に——地獄の火花が、今咲き乱れる！！

プロローグ（前書き）

こんなの真に受けたら、駄目ですよ。

ブローグ

かつて、戦争があつた――

西暦二十三世紀、人間の侵略の手は遂に、外宇宙にまでにおよぶ。豊富な資源を求めて、平和な地球の宙の遙か彼方に舞台を移して、国同士が新しい領土を奪い合った。

だが――、

2214年12月22日 日本時間 午前8時12分

人類史初めての？ポール・シフト極移動？が発生。

地球にいや、人類に甚大な被害をもたらし、四十二年に及ぶ？星間戦争？が地球からの制裁を受けて呆気ない幕引きでが終結した。

――そして、七年の時が流れた。

サイヴァ多田イッチヲラテクオ由ミシク

衣。食。住。これまで宙に向けられていた金と技術が、瞬く間に世界を修復する。

だがそこには、崩壊した統治が**バナンス**賸した、混沌とした旧世界そのものであった。いや、もっと悪い。

産廃扱いの大量破壊兵器、それらを片手にマフィアに鞍替えした傭兵共。地球最後の日を信じて妄信するカルト集団。本当の自由を手にした、**マンティコア**人造人間。それらに群がり、おこぼれを貰おうとする、奪おうとする者達。そいつ等を一つに纏めて狩る正義。

あと、もう一つ――それは――文字通りの新世界だった。

血に酔う街？

大地に線路を敷くのをやめて、大海原に根を張る真空チューブの中を、時速約2200？で滑る高速装甲鉄道？轟天？。位置エネルギーだけを動力とし、空気抵抗0で滑る革新的発想。車両は元々、宇宙用に設計されたが、それが開発者の眼に止まり現在に至った。七年前の災害時、走行中の車両に死者は一人も出さず、8日間海に沈んだと言う。一部では、核シエルターより頑強だと言われる。しかし、特に注目する点は、その真空チューブの強度である。未曾有の災害で陸路は殲滅したが真空チューブの損壊は世界全体で、僅か8%。

フアンの間では列車側かチューブ側どちらの方が丈夫かで良く論争となる。更に、製造メーカー側も自社の作品に異常な執着振りを見せ、両社一步も退かず日夜更なる発展に突き進む。

開発者の発表では、これは真空チューブと車両の絶妙なパワーバランスで成立する頑強さであり、一方に強度が偏り過ぎるとたちまちバランスが崩れると言う。

因みにその開発の原点が、ある東洋の国に行った時の、絶叫マシンばかりの遊園地だと知る人は少ないだろう。あの日から、七年。今も、世界中から信頼される地球で一番安全な乗り物である。

しかし、その血と汗と涙の結晶の中で、今まさにそれに対して怒りしか沸いてこない一人の女性が居た。

そこで彼女は“ある意味で”生死を別つ決断を下す。

口を半分開けたまま、スパークリングウォーターの消えかかっている泡をただ見つめている。

ゴクリ。と生唾を飲んだ彼女の額に、一筋の汗が流れる。

兆候を表している、頭痛。目眩。

「いくら何でも一口ぐらい飲んでも…うん。ダイジョブ、ダイジョブ」

ガブリと一口飲むと、彼女はその一口を後悔した。ジワジワと冷や汗が吹き出してくる。頭痛も酷くなってきた。だが、それよりも胸のあたりに言い様のない不快感がグルグル回り始める。そして、
……ゲブツ……グッ！

胃の中からわいて出てくる二酸化炭素。それを吐き出し、呼吸をする度に吐き気が増す一方。そしてついに、それは暴れ出す。

「ヤ・バ・い」

臓腑の底から沸き出してくる戦慄と共に、我を忘れ、立ち上がりトイレにむかつて走る。

口を抑えながら、早足で慌てずに、かつ素早く、トイレに向かう。四十分おきにトイレに顰めっ面で駆け込む姿に他の乗客達はどよめき、眉を顰める。

すれ違う度に皆の眼が、彼女に注がれていた。そんな眼でじつくりと見つめられたら、そのたびに猛烈な自己嫌悪に陥ってしまう。果たして読者に耐える自信はあるだろうか。

ご免なさい。すみません。許してください。通して。

ドアがボタンと閉まった。と同時にざわめきがやんだ。静寂が二秒。

「~~~~~」

便器に顔を埋めて嗚咽が洩れた。

一度洩らすと、それは途切れることなく、流れる水の音とともに、まるで変奏曲のように響き渡り、唄のように巡る。

冷ややかな眼差しは、いつしか同情に変わっていた。

「おい。彼女、診てやれよ。それでも医者か？」

一組の老夫婦の会話が始まった。

「何言ってるのよ。アタシは歯医者よ。それに街に着いたら、多分大丈——」

「~~~~~」

「本当に大丈夫かしら？」 そんな視線など意中に無く。ただ吐く音も無く走り、十円玉が立つほどの揺れの無さ、ゆったりとした

座席。冷房のきいた車内でどうしてあそこまで。

だか、子供達の遊ぶポータブルゲーム機のボタンの音や後ろの禿頭の寝息が、彼女にとっては不協和音でしかなく、ひたすら苦痛でしかなかったのであった。

吐く物がとうに尽きているが、胃痙攣は留まることを知らず、口の端から唾液が滴り、なおも苦しみ続ける。

やはり、気になりだした乗務員がトイレの前に立ち、声をかける。

「大丈夫ですか？」

「はい……」

乗務員にトイレのドアを外からノックされ、中から出てくる。

「……大丈夫……です」

そつとまわりを見回して、顔を出した彼女の憔悴しきった顔は、極めて絶望的な色であった。

「本当に大丈夫ですか？」

「……はい」

やさぐれた彼女の心中を察して、緊急時の勧める。彼女は頭痛や目眩に苦しみながら、酔って乱れる足で乗務員達に個室に案内される。彼女は軽く頭を下げた。

そこには寝棚^{バンク}があり、彼女は直ぐに、仰向けにひっくり返った。

「もうすぐつきますからね」

「……ずいま……ぜん」

その時、彼女の黒い瞳が一瞬、青く変わるのを目撃した。

「失礼します」

乗務員は出たあと、我に返って一度ふり返り、また歩き出す。気のせいだろう。

一人になってからしばらくして、彼女は深いため息をついた。今の気がついたかな？

天井を見上げたまま、じっと動かない。

あと一時間程で到着し、この無限地獄からも解放される。それまでの辛抱と彼女は心の中で言い聞かせて十五分後、再びトイレに駆

け込んだ。

状況は悪化の一途を辿る。

「もう…勘弁して」

腹を押さえながら、トイレから戻る彼女の目の前に、一人の少女が現れた。

生まれてから無菌室で育てられたような風貌で、どこか浮世ばなれしたかぐや姫のようだった。

その小さな手には、一粒の飴玉が握られていた。

「アメちゃんあげる。これ舐めると気持ち悪くなるの」
すると、彼女はようやく眉間の皺をゆるめた。

「ありがとう」そう言って飴玉を受け取った。

「こら、だめよまだ走っちゃ」一つ向こうのVIPルームから母親らしき声が聞こえた。

「はぁーい」と、少女は手を振って、まるで今まで籠の鳥だったように走り回り、列車内の探検を開始した。

真空チューブから、抜け出した列車が海から浮上する。

直後、船底が変形して、列車は水面走行へ変わった。

真っ暗闇なスモッグを映していた車窓が切り替わる。青い世界はに変わり、乗客達は感嘆とした声を上げた。

あの少女も大きな目を見開きながらその光景に魅入っている。だが、その後ろの彼女は少し違う。

分厚いガラスの向こうに広がる倒壊した建物の瓦礫の山。それで埋まる海が現れ、彼女は、それをただ傍観する。どこか懐かしい物を見るように。

蛇行をしながら進む数キロ進む、不気味な曇天の下に広がる、巨大な摩天楼が見えた。

周りから次々と浮上し、併走する同型車両。いずれも同じ目的地を目指しているに違いなく、目的も同じ。

あそこが故郷の街。旧××県××市。しかし、現在での名称は日本第四特異地点『DEAD ZONE』《デッド・ゾーン》

周りで歓声上がる最中、彼女は口にアメちゃんを放り込んで、「寝よ」と一言。それどころではないと、さっさと戻ってしまった。あのアメちゃんの効果は絶大だった。箱買い決定。

そして、列車は予定より二十分遅れて到着した。断じて私のせいじゃ無いと信じている。

電磁弁のロックが解除され、分厚い装甲が動く。静かなモーター音だけを立てて扉が開いてスロープになった。

『第四地点ターミナル。第四地点ターミナル。お出口は左側。なお、この装甲列車は本日、臨時ダイヤで運航しておりますので御注意下さい』

駅のアナウンスがスピーカーから流れる。

バンクから起き上がりながら、彼女は黒いジャケットを着て、緩めていたベルトを締め直す。

そこに乗務員が入っていく。

片手には、革張りのブリーフケースが下げられていた。

「だいぶ楽になりましたか？」

「こちらがお預かりした、物です。銃のお受け取りは受付でお願いします」

「本当にスイマセンでした」

「あの…どうしてあんな所に。もしかして賞金稼ぎ《バウンティ・ハンター》か案内屋あんないやの方ですか？」

「やだなあ、違いますよ。ちよつと人探しです。でも、物騒な街つて聞いているし、やっぱり…」

その時、彼女の表情が変わる。

「お客さ……」

それを見た乗務員は、突然、硬直した。

「マズい」

「ちよつと…まだアレみたいです。じゃっ失礼！」

彼女はそそくさと荷物片手に出て行く。

「どしたの？」戻りの遅いので同僚がやってくる。同僚は後ろから

肩に手をかけた。

「ひいつ」と洩らした彼はその場に昏倒した。
一体彼が何を見たのか知るものはいない。

吸い込んでだ空気は車内のビュツフェより美味く感じた。

「はあ……死ぬかと思った」思わずつぶやく。

先程、アメをくれた少女が手を振る、装甲列車へ振り向いた彼女は啞然とした。

今、外から見て気がついた。もう遅い事だが、私の居たすぐ真下には電磁浮遊用の発電機の車軸が回っていた。道理でさっきよりキツい訳だ。って、判っててあそこに連れて来たのか？アイツは？信じられない。

「まあ……いいや」

すぐに開き直って改札口に向かい、出て行った。

「ねえ、大丈夫だったでしょう。ああゆうのは気持ちの問題なのよ」それは先程の老夫婦だった。

「ああ。で、お前はどうか？」

ご婦人は腹部に手を当て、そして笑った。

「ええ。大丈夫よ」

血に酔う街？

生まれ故郷の大地を再び踏みしめた感触が心地よかった。生温い風が頬に当たり、彼女は空を見上げた。

灰色のどんよりとした低い雲に覆われていた空を睨む。

恐らくあと、二時間程で雨が降り出すだろう。気象庁の天気予報は嘘をついた。最近の予報は当たらない。予報士はサイコロで決めているのだろうか？

腕時計の針は2時50分。

「まだ早いかなあ」

さっきの荷物を一旦預けて、ターミナルから市街地に繰り出した。バスに乗ろうとしたが繁華街は富裕層の人混みでこった返す。明らかに場違いな空気が嫌になった。交差点にさしかかっり脇道に入っ
て、そこから裏の小路に出た。

だが、裏街道に一步入ると、そこには予想通りと言えば、予想通りの光景だった。ここは見捨てられた横丁。澱んだ空気と古い小便の混じり合った匂いで支配され、今は宿代にも事欠く浮浪者達の溜まり場と化した。今の世間で言う『敗退者』アンダーグラウンドピ
ープル達。歩道の片隅にはヘッドディスプレイで電子ドラッグに吹ける若者が白昼夢に浸り、干からびている『干物男』。ほかに正体不明の胡乱な連中がうようよ居る。その歩く格好は明らかに人間以外をものといいうような感じだった。

エリア一つ超えた、その先は別世界そのもの。ただが、こんな所の方が居心地はいい。古めかしく、とうの昔に廃れてしまったスタイルが続いている。

——何でだろう？古い物こそ彼女の心に強く訴えるのだった。ペンキで分厚く重ね塗りされた抽象画、一面を覆う下品な落書き、弾

痕らしき跡も目立った。迷える跛行者に道を教える。ファツシヨナブルな人種の出入りするカフェより私向きなのは確か。何故だろう。行く手の街路に埃っぽい風が吹いて、新聞紙が足元に飛んできた。彼女はそれを拾い上げる。くたびれた新聞の文面に目を凝らす。

××新聞・三月十七日

マンティコア
—— 人造人間、独立へ ——

『ライオウ』初代女王・アサンドラ・レオニダス・アトラーは独立を宣言し、次の声明を発した。

—— 我々は七年前に貴様達に棄てられた、だから好きなように生きてきた、これからもだ。

—— 別に、ワタシはお前たち人間のように野蛮な報復はしない。だが、このテロメアが限界を迎えるその日まで、

—— 好きに生きさせて貰う ——

ポール・シフト
極移動後、内政の崩壊して内戦中だった中東での不特定多数の人造人間マンティコアの武力介入により、去年内戦が終結したばかりのアラオザル王国からの分裂に国連会議では、『復讐への布石』マンティコア『人造人間にだって人権はある』と、独立に対して、意見は真つ二つに割れている。日本は二番目に独立には承認し、レオニダス女王は年内に来訪を予定している。しかし、一昨日、闇社会との臓器売買などの関与が取りざたされたばかり、いずれにしろ、150カ国以上の意見が割れている以上、『ライオウ』の国際社会の参加はまだまだ先の事になるだろう。

—— 毎年恒例 謎のオタマジャクシ ——

空から通常以外の“異物”が降ってくる所謂いわゆる、(FAIISFR OmTheSKIES)《フォールズ・フロム・ザ・スカイズ》ファロッキーズ現象。今年も空からオタマジャクシが降ってくる事件が今月15日に相次いで発生した。県内で200年以上続くこの

現象は依然原因不明で、七年前の“^{ポール・シフト}極移動”以降現在までに、年四十件を超える。降ってくる種類も多種多様になりつつ、年々増加傾向であり、昨年では、体長20メートルの雄のシロナガスクジラが降ってきて、民家が一軒全壊し、周辺住民が避難する事件があった。管理省では対策本部を設置されたが根本的な解決には至っていない。しかし一部では、同年に行われた月面での反相対性虚質空間ゲート起動実験事故の影響ではないかとの研究者からの意見もあり、現在も黙過調査中の模様。

印刷は汚く、写真の出来も悪く、読みにくい。紙面の半分がごく特殊な趣味の人間を対象にする店舗の広告で埋まっている。その片隅にそれは掲載されていた。地方紙何だから、何で？こつ………もつと……。

——警察労使交渉決裂！遂にスト突入へ——

日本警察当局は民営に委託した、“A・B・C”^{デモ}《秋葉原・バベル・コーポレーション》》に対して各地で大規模な抗議活動が行われた。給料の40%カット、年金の廃止による労働環境の悪化を訴えている。一昨年の殉職者は二百人を超え、拳銃自殺者も相次いだ。

『年金復活！！』『給料払え！！』日頃の悪循環に鬱積される警官の掲げたプラカードには、怒りを込めたスローガンが書き連ねられ、見守る市民に訴えかけている。しかし、市民には『警官は公務員だろ！』『正義に代価は必要なのか！？』などストライキに反対の意見が根強い。しかし、来週にもストライキを予定し、今後——

彼女は読むのを止めて、新聞を閉じた。
「今日だ」

血に酔う街？

「この辺でかなり腕のある医者がある。聞いて聞いただけで、知っている？」 読んだ新聞紙を渡して、彼女が質問する。

「医者だつて？ ハハツ！ 何言つてんだよ。」

渡された新聞紙を燃やして昼間から灯油缶の焚き火に当たる男達。

「そうさ。ヒヒツ！ ココが医者だよ！ コ・コ・ガ」

三十代ほどの白髪混じりの男が応える。薄汚れた服を着て、常日頃、残飯を漁る生活のようだったが、妙に健康そうだった。頭以外は。

「は？」

彼女は首を傾げている。こんな返答が八人。理由は「知るかそんな事」の一点張りだった。

彼女は腕時計を見ると四時半を回っていた。「ぎよ」

これだけで2時間もたつぷり貴重な時間を浪費して、しまった！ と時計から顔をそむける。

彼女は長いため息をついて、口をへ字に曲げて立ちつくす。

しばらく黙っていると、向こう側からの四人組の警官が、やけに嬉々とした表情でやって来た。

それを見るや突然、青ざめて彼は狭苦しい路地へ逃げ出した。

「あつちよつと！ まだ聞いてない事が」

そして周りの連中も何時の間にか姿を消して、通りには誰もいなくなつた。私を残して。

冷たい風が辺りに吹いた。彼女は少し睨みつけるような表情で振り向いた。彼女に取り巻く男が四人。

「見ない顔だな、何時からここに居座つてる？」

異常にたくましい肉体と短髪に制服姿。男達は、見下ろすように立ち、聞いた。

「外から来た人間だな。いつ来た？」

両手をズボンのポケットに入れたまま冷然として答えた。

「ついさっき」

「生まれは？」

「ココ」少し、驚いて

「来る前はどこに居た？」

「フランスに」

「あそこはガラクタ《アンドロイド》ばかりで大変だろ？居心地の悪いのなんの」

「ええ、色々大変でした」

「安心しろここには一体も居ないぜ。かなり前に居なくなつた。どつかのイカレ野郎が大暴れして、一体残らず破壊した。確か名前は
×××××」

その言葉に聞いたとき一瞬表情が動いた。

「何だ、知り合いか？」

「いえ……多分違います」

「何だ……つまらん」警官は肩をすくめた。

「そう言えばまだだった。IDカードとNII（ノイ・インゼクション非感染）カードを見せろ」

「そんなの有りませんよ」

そんな解りきっている事を何故警官が聞くのか？嫌な予感が脳裏によぎる。

見合わせた後ろの三人は粗ばらな歯を一杯に剥き出してニタニタ笑っている。

その答えはすぐに出た。

段々、論理や話し合いで終わる気配が失せてゆく。そして「へえ……そうなんだ」と面白そうに言つて身を屈め、彼女の顔を覗き込んだ。

粗野丸出しの下種の視線が彼女の全身を舐めまわす。

「そりゃ、大変だな。あれが無いと病院どこるか買いい物も出来ない

んだぜえ。無論、被害届けも出せない」

そいつは彼女の頭から爪先までじろじろ見てから、にやりと笑った。

「そういえば、名前聞いてなかったな」

無言。名乗っても仕方がない。名乗りたくも無かった。

「おいっ！なんだよ？聞いてんのか！？」

彼はいきなり手を伸ばして、グイと右腕を掴んだ。

「放してよ」

跳ねのけると、血走った眼が見つめていた。

「っあ——…いつてえエ——おい、コラ女。痛いだろ」

ゴツい拳が顔面を襲う。予期せぬパンチを喰らうと、衝撃で一メートル程、後方に吹っ飛び尻餅をついた。

女の唇から、細い朱のすじが流れ落ちる。それを手の甲で撫でた。

『——はあん（笑）』

うつむく口元が幽かに吊り上がる。彼らはそれに気がついてはいないようだ。

男は薄笑いを浮かべながら、右肩を揉みほぐすように左手を当て、右腕をブンブン振り回す。

男の拳の関節は、盛り上がっていた。格闘技で言うところの拳ダコだ。

「あ——あ、大ちゃん怒らせた。知ンねーぞオ——？」

リーダー格の含み笑いが一同を振り向かせる。

五分狩りの頭を撫で回しながら「俺達今、ストライキに入ってよ。金がなくて風俗にも行けないんだ」

「だからさ頼むよお、俺達と一発どうよ？」

「なあ——にこんな奴、歯一本折れば、何でも言うこと聞くようになるさ」

彼女はゆつくりと立ち上がる。

彼女は逃げようとはしなかった。そして、辺りを見渡した。

「残念ながらテメエを守るのはテメエしかいねーよ」

「殺すなよ。それに顔を狙うなブサイクになる。ボディー狙え、

ボディー」

「最初は俺からだからな」脇でもう一人が言った。

「分かってるよ。一発で——」一歩踏み込み、

右フックを放つ。「はい、終わりっ!!」

その時、彼女の身体が突然、ブレた。

彼女の体に触れず空を切る右腕。その腕の筋肉がまるで彫刻のような筋をつくる。

手加減はなかった。見守る全員が風を感じた。

食い扶持を繋げる為に参加した、裏世界のベアナックル・ファイト。それが今彼のライフワークであった。一夜明ける毎に玉座の変わる、今夜も渡さない王者の最強のパンチがかわされたのだった。

二周りも小さい女に。

神速のダッキングで髪の毛が乱れ、懐に入る。

身を沈めて、逆立ち。そのまま両手がバネのように跳んだ。

両脚が股間目掛けて、撃ち込まれる。

身長二メートルの筋肉の塊が地面から十センチ程浮いた。反転した瞳に彼女の薄笑いが映る。一撃で彼の睾丸が潰された。

言いようのない苦痛が全身を駆け巡り、肺の空気が一気に逆流する。身体を二つに折り、呻きが舌を押し出し、すぐに前のめりに倒れた。無様な格好で横たわる。

死にかけていが生きていた。ちゃんと痙攣もしている。

良かった。死んでない。リーダーはチラリと一瞬、潰された股間を見つめた。赤いものが地面に沁みを作っているのを眼にする。「てめえ!!!」

アレの同情より先に、死刑執行の合図が下った。

全員の視線が彼女に集中する。そうして二歩、三歩と前に出る。ショートカットの髪の下から、彼女の瞳がこちらをむいた。

「この女あまあ!」四方から襲いかかる屈強な男達。

女の手足は男達の何倍も速く動く。それはまるで水のようなだった。後方から右脚を薙いだ。

蹴られて横転する顔面へ引いた足の膝が叩き込まれる。顔から膝が外される時、ポロポロと口から歯が零れ落ちる。

可哀想に彼は二度とホットドッグをかぶれない。

特殊警棒で打ちかかる。殺人^{キル}レベルの高圧電流が彼女に触れたと思つた刹那、渦を巻くような鮮やかな一回転、その渦に警棒を握りしめたままの腕が巻き込まれる。そして肘が明後日の方向へ曲がつた。その痛みを感じる間もなく、彼は脳天から地面に激突する。

関節を極める、投げる。そして、折る。今や国際競技となった柔道の影に隠れがちだが、その技は凄絶なものに変わりはなかった。

「この野郎」

一步下がり、警官が脇のしたへ手を入れ、ショルダー・ホルスタ^{スリー・アクション}に刺さつたベレッタM96FSを抜き、構え、引き金を引く。

それまで、三動作。

彼女はそれと同時に右手を開き、軽く振つた。

それまで、一動作。^{ワン・アクション}

掌に朱色のすじが走り、音も無く裂け始めた。

それはクパツアと、口を開け、鈍い光が走つた。

彼は最初、日頃よく眼にするワイヤー系が飛びナイフの類に思えたが違つた。明らかに何かが、何かが、手から生えたかように見えた。それは眼に見えない糸に操られるように手の甲に突き刺さる。一メートルほど繰り出したそれは、鞭のようにしなりそこから、刺さつたまま、大きくネジれ、メリメリと肉と骨を分ける。

えぐり出される傷口から鮮血が舞つた。

右の袖口へと鋭い切尖が血の糸を引きつつ、緩やかな弧を描いて、手に吸い込まれていく。

「……ぐうお」

銃を抜こうとした右手を押さえて、全身の力を抜いて膝をつく。

すぐあとにこめかみの辺りで空気が揺れた。

その刹那、凄まじい衝撃が脳を震動させる。

鮮やかな前蹴りだつた。そのまま、崩れ落ちる。

一息ついた彼女はジャケットを脱ぎ、埃を払い落とす。また、羽織る。

警官の髪の毛を掴んで、妖々とささやいた。

「女抱きたいなら、『金を払う』か『惚れさせなさい』まったく」

警官は情けない呻きを漏らして、眼を細く開ける。目尻を切り、鼻血がタラタラ流れていくのを感じながら。

「お前こんな事でただで済むと——」

「思ってたの？」

凄みの聞かせた声が彼を黙らせる。

「さっきのは許してあげるから私の質問に答えて」

彼女の方に向いた顔は、不安と恐怖を隠しきれず、顔は、シャツと同じ薄汚れた白い色に変わった。やがてそこから冷や汗が吹き出し始める。

「こうゆうの治療出来る医者を探してるの」

彼女は右手を開いた。

また？アレ？が掌から生えてくる。それは首に纏わりついて来た。

「ヒイイ——」

何だこれ。何だこれ。何だこれ。何だこれ。何だこれ。何だこれ。

何だこれ。何だこれ。何だこれ。何だこれ。何だ（ry

沼地に住む両生類のようなヌメヌメした肌触り、形容し難い芳香が鼻腔を通り、脳髓を刺激する。

その匂いのせいか狂乱に陥った脳は冷静さを取り戻した。

「それは言えねえ。言ったら何されるか、これ何とかしてくれ！」

「いいわよ、後でね」

彼女は破顔して、アレは首に力をこめる。

「があ…はあ…」

「質問に答えて」

「分かった…話す」

「素直で宜しい」

彼女の表情が千変万化し、彼を嘲笑う。

「山本沙耶^{やまもと さや}って女医だ」

閉鎖した、K大学病院だ、その閻医者だよ。正確には獣医だけどな」

半年前にいきなりやって来て、一口咬ませたらあつと言う間に今じゃこの辺のワル共が跪いてる」

「何でその獣医さんがあんな達とつるむの？」

「よくわかんねえがお前みたいな化け物の扱い方知ってる奴だ」

「違う」

「はあ？」バチィン。男の目の前で火花が散った。遠くで『化け物なんかじゃない』そう聞こえたような気がしたのは、男の気のせいなのか。男の世界はフツとフェードアウトした。

「獣医ね…」

艶消しの黒い刃物を掌から引きずり出される。粘液が糸を引いていた。

「あたしにピッタリかもね。ある意味かな？」

血の付いた刃先を舐めた。それを再び掌の中に帰した。右手の中で開いてた口が閉じる。右手を眺めながら何度かにぎにぎする。

「それにしても病院か。注射器とかだったら嫌だな」考えただけで痛くなってきた。

「動くな」

背中嫌な空気を感じる。荒々しい靴音が聞こえてきた。

振り向いた。その数、十四人。周囲に人数分だけの拳銃が、彼女に向けられた。どれも遊底^{スライド}を引き、初弾^{チャンパー}を薬室に送り込んだ体勢だ。

彼女は四方へ眼を走らせ、声に出さず舌打ちした。少し間を置いて銃声が鳴った。

血に酔う街？

—— 2222年 日本 第四地点 B地区

日が昇つても、明るさの変わらない、平日の午後の事だった。

銀行。中は小さいながらも別世界のように、甘い花の香りとシツクな連中に満ち溢れていた。

そこに回転ドアをくぐる一人の男。右手には縦30センチ、横60センチ、厚み15センチ程度の黒い革製の鞆が揺れていた。

「いらつしませ。ご用件を」受付嬢は言った。

「えーとそれじゃ」

どこぞのサラリーマン風だ。背広も下のシャツも上等。ネクタイも良いセンスだ。禿げかかった頭に銀縁眼鏡の下顔は知性を漲らせていた。ただ、眼だけが違った。

「とりあえず金庫の金、全部」

「はい？」受付嬢は目をパチクリさせた。

黒革の鞆を引き上げ、弾けた。鞆の中で折り畳まれた銃身が跳ね上がる。それはごちゃごちゃとした変形を繰り返し、やがてそれは本来の姿を取り戻した。一体どうやって収まっていたのか、さつきより一回り二回りも、それは大きく見えた。

ドウウン！！「ウオッ」

ドウウン！！「ギャッ」

警備員は突然の先制攻撃になすすべもなく撃ち殺され、彼等は呆気にとられた。

それもそうだ。ダイラタンシーの装甲服、ヘルメット、そしてMP7Aを身に着けた警備員が居るこんな所に押し入ろうとするのは自殺志願者だけだろう。皆がそう思っていた。だが、目には目を、防弾にはそれを貫く弾で、奴らはここにやって来た。

広間には銃声ロビーが響き、誰かが悲鳴を上げた。彼等の目の前は防弾ガラスに仕切られている。大丈夫だ。しかし弾は防弾ガラスを打ち

抜き、そのまま真向かいの壁に突き刺さる。最後の砦は脆くも崩れ去った。

「さっさと金庫を開けな」割れて開いた巨大な穴をくぐり、恫喝する。

突如起こった出来事に啞然となった時、猛烈なエンジン音が轟く。今度は何だ！？ガラスが四散し蝶のように跳び、金属の折れ曲がる快い音が響きわたる。壁を壊し、巨大な装甲車がバックで突っ込んできたのだ。コンクリートの破片をまき散らし続けている壁と天井。そのぶ厚い装甲板が勢いよく開いた。

戦闘服を着た奴。黒いブーツにサングラスをかけた奴。頭がツルツルに剃り上げた、腕から刺青が見える奴。ひと目でゴロツキとわかる男たちがぞろぞろと出てくる。

「何だ、もう片付けちまったのか！？予定と違うぜ」

「コイツらがかつたるいんでな、こんなモンまだ着やがって。弾はもうチト、ケチるば良かった」

「よく言うぜ。まったくよ」

「気に入ったか？タンク・バスター携行対戦車砲は」

「最高。でも、徹甲榴弾が撃てなかったのが少し残念だな」

「仕方ないですよ。そうしないと警報機に感知されますから」

「だよな」

「なーソレあとでオレに貸してくれない？」

「構わん。コイツは俺の趣味じゃない」ポイと投げ渡した。

「ウヒョー！すげーや！」両腕に抱え、新しい玩具を買って貰った子供のようにはしゃぐ。

「こいつがあれば、だって軍隊だって目じゃないぜ」

「流石に機甲兵装相手は無茶じゃないか？」

「いや、いくら強化装甲でも中身は人間なんだ。アレ食らったら、貫通しなくても骨は折れるし、内臓だって破裂する。結局お陀仏だぜ」

「今のうちに逃げよう」柱の陰から一人が呟いた。

「動くなあああ!!!!」

あの銃口が店内をゆっくりと店内を舐め回していく。

——PM4:44——事件発生

血に酔う街？

禿頭はポケットから煙草を出して火をつけた。

「きつと俺のこと悪党だと思ってるだろ？」彼は煙草の煙を吐き出した。

「ああ、最低の屑野郎だ。貴様たちは――」

彼は自分が割りこめる余地でもありはしないかというような口調だった。しかし、その眼の動きは神経質で、自信たっぷりの態度と裏腹に、やけっぱちで、他人に対する共感力は微塵もない。俺は暫く話を聞いていたが、早くもうんざりしてきた。色々言っている割に鋭い指摘は一つもない。自分は一センチも尻を動かさない。デスクに陣取って顎で人をこきつかう事が頭の優秀な証拠だと思っている典型的なタイプだった。こいつにはそれに気づくだけの頭もないだろう。きつと核実験の指令を下せるのはこんな人間に違いない。こんな奴にはみんなも言ってやれ『てめえがやってみる！』ってな。

禿頭からわざとらしいため息が口から漏れ、彼は眼鏡を鼻の上に戻した。

「そうかい。お前たち聞いたか！？コイツは俺達が嫌いだとよ」

禿頭は背中 hands を伸ばした。何も無いと思っていた男の背後から生えてくる。彼が取り出したのは、銃身を切り落とされた愛用のイサカM37ステーク・アウト。やっぱりあんなのよりコイツの方が俺の中では一番しっくり来る。

手になじむグリップを握り絞め、口元が笑うが、その目つきは全く笑っていないかった。

よく見たら奴の薬指には指輪の後が。やっぱりな。そんなんじゃ嫁にも逃げられる。

「じゃあ明日から、恋人は左手かな？」

メガネ越しのまなざしは正確に右手を捉え――トリガー《引き金

轟音がとどろき、空気を震わせる。耳をつんざく銃声に奥の方で、女性が恐怖の喚き声をあげ、すぐさま同僚に黙らされた。

赤い尾を引いて、空中に四散する五本指。指はその辺に散らばり、破片は跡形もない。驚愕の叫びは、次の瞬間、凄まじい苦鳴に変わった。眼を剥き出している。当たり前か。

「あつ ああ …… はっ …… はっ …… はっ …… はっ」

「おい、誰か手え貸してやりな」

広間に大爆笑の渦が湧き起こる。

「さあ、起きた起きた」痙攣を繰り返すの彼の胸ぐらを掴んで引き起こす。

「さっさと開けるんだ」その声はさつきよりも冷静で抑制の効いた声だった。

うぬぼれもプライドも消え失せ、今は情けない顔をして、暗証番号を打ちこみに向かう。

「ひゃあーはっは！ひでー格っ好！」

蟹のように横ばいになり、金庫に向かう姿に破顔する一同。

「早くしろ、出ないと口でする羽目になるぞ」

「出来る訳ねーだろ。あんな腹じゃ」

ケツに小突くたびに彼は震えていた。

文字盤を真つ赤にしなが、飛ぶように動く。彼はただ何も考えずに押した。そして、赤いライトが消えて緑のライトに切り替わる。

金属の触れ合う音がして錠が鳴り、真空状態だった金庫室内に空気が流れ込む。

開いた大きな鉄扉をくぐるとそこには――。

金。金。金。金。金。金。金。金。金。金。その他顧客の保管金庫が並ぶ。

一同の歡聲。

「ヒャー！ースゲエ量だ！今夜はいい夢が観れそうだぜ」

「しかし今時、現生でこんなに一体何に使うんだ？」

「知るかよ。それよりはあれ見ろよ」

「札束のベットだぜ。いい夢見れるぜー」

山済みの札束に頬ずりしながら「いいねえ~~~~~でも、ちよつと固い」

「おつし！それじゃあ、ずらかるとするか。タイガースの試合が今夜あるんだ。見逃したくねえ」

煙草を投げ捨てた禿頭は、SIG P229をホルスターから抜いて遊底^{スライド}を引く。ゆつくりとに歩み寄った。肩を荒い息で上下する男の大きく目を見開く額に銃口を向けられる。

もう自分は安全だ……。そう思っていたか？アホめ。トリガーを引いた。

血に酔う街？（後書き）

禿頭はポケットから煙草を出して火をつけた。

「きつと俺のこと悪党だと思ってるだろ？」彼は煙草の煙を吐き出した。

「ああ、最低の屑野郎だ。貴様たちは――」

彼は自分が割りこめる余地でもありはしないかというような口調だった。しかし、その眼の動きは神経質で、自信たっぷりの態度と裏腹に、やけっぱちで、他人に対する共感力は微塵もない。俺は暫く話を聞いていたが、早くもうんざりしてきた。色々言っている割に鋭い指摘は一つもない。自分は一センチも尻を動かさない。デスクに陣取って顎で人をこきつかう事が頭の優秀な証拠だと思っている典型的なタイプだった。こいつにはそれに気づくだけの頭もないだろう。きつと核実験の指令を下せるのはこんな人間に違いない。

こんな奴にはみんなも言ってやれ『てめえがやってみる！』ってな。

禿頭からわざとらしいため息が口から漏れ、彼は眼鏡を鼻の上に戻した。

「そつかい。お前たち聞いたか！？コイツは俺達が嫌いだとよ」

禿頭は背中 hands を伸ばした。何も無いと思っていた男の背後から生えてくる。彼が取り出したのは、銃身を切り落とされた愛用のイサカM37ステーク・アウト。やっぱりあんなのよりコイツの方が俺の中では一番しっくり来る。

手になじむグリップを握り絞め、口元が笑うが、その目つきは全く笑っていないかった。

よく見たら奴の薬指には指輪の後が。やっぱりな。そんなんじゃ嫁にも逃げられる。

「じゃあ明日から、恋人は左手かな？」

メガネ越しのまなざしは正確に右手を捉え――トリガー《引き金

「しかし今時、現生でこんなに一体何に使った？」

「知るかよ。それよりはあれ見ろよ」

「札束のベットだぜ。いい夢見れるぜ」

山済みの札束に頼ずりしながら「いいねえ~~~~~でも、ちよつと固い」

「おつし！それじゃあ、ずらかるとするか。タイガースの試合が今夜あるんだ。見逃したくねえ」

煙草を投げ捨てた禿頭は、SIG P229をホルスターから抜いて遊底^{スライド}を引く。ゆつくりとに歩み寄った。肩を荒い息で上下する男の大きく目を見開く額に銃口を向けられる。

もう自分は安全だ……。そう思っていたか？アホめ。トリガーを引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5468v/>

DEAD ZONE

2011年11月27日19時46分発行